

The Cage

トカゲをひっこむか籠めしうさぎ

いしざわみな

【登場人物】

鈴木一穂(すずき いっすい) 通称はカズホ 四〇代前半

山岡美波(やまおか みなみ) 大学生

古城梨々子(こじょう りりこ) 三〇代後半

鈴木一徹(すずき いってつ) 五〇代前半

【第1場】

年数を経た1DKの部屋。舞台奥に玄関ドア。玄関の手前、右側にシンク、左側にトイレとバスルームがある造りだが、全体が見える必要はない。

unnecessaryなものがまったくない室内。

対照的にベランダは、ガーデニングが施され、まるで小さな森のように生命力を発している。

薄い壁を隔てて、隣の部屋のベランダ。

そこに現れた山岡美波、何やら切羽詰まった様子で隣室の様子を伺っている。

部屋の主、鈴木一穂が現れ、美波は慌ててしやがみ込む。

一穂 秋の雲だね。気持ちいいな。最近よく食べるよね。ちょっと太ったんじゃない？ 食欲があるのは健康な証拠だからいいけどさ、少しからだ動かした方がいいかもね。夏も終わりだねえ…… 今日、梨々子さんが来るよ。—— 実はずいぶん前から行ってみたいって言われてた。—— だってなかなか心の準備がね。ここに人が来たことないからさあ… 誰かが来るって考えたこともなかったもん。柄にもなく布団買ったよ。—— 必要ないかも知れないけどさ、泊まっていいってもいい？ とか言われたら困るでしょ？ 来月に入るとまた芝居の稽古が忙しくなるみたいだからさ、手料理をふるまおうと思ってさ、何つくるか悩んだよ。

一穂、キッチンと部屋を歩き来しながら、朝食の準備を整えていく。

一穂 何にしたと思う？ 基本的に家事はできるってところを見せておいた方がいいと思うんだ。彼女も安心するでしょ？ ちょっと気にしてるみたいなんだよね。ほら、公演中とか家事がおろそかになるかも知れないって。—— もちろん、まったく問題ないって俺は言ってるんだけどね。でも、そういうところいいよね！ で、俺の料理、あんまし出来すぎてもマズイでしょ？ プレッシュャーになるからね。だからカレーにしたの。特製カレー！—— 普通すぎる？ 普通じゃないよ。米にはとことん拘ったからね。知ってる？ キタキツネの泪。日本で一番カレーに合うって言われてる幻の米……

朝の食卓が整い、一穂、席に着く。

一穂 これ食べたらい物に行ってくるね。いただきます。

一穂が食べ始めてしばらくすると、玄関で呼び鈴が鳴る。

一穂、いぶかし気に玄関へ向かい、のぞき穴から相手を確認する。
一穂、少し慌てたように身なりを確認し、ドアを開ける。

美波 すみません突然！ 私は隣に住んでる山岡美波と申します。朝からすみません！
一穂 知ってますよ、もちろん。

美波 あの、すみません。実はお願いがありまして…… 今日はお休みですよ？

一穂 よく知ってるね。あと交代で一日休めるんですけどね。

美波 今、忙しいですか？

一穂 今？ 遅い朝めし食べて。

美波 すみません！ 食べ終わった頃また来ます。

一穂 食べたら出かけるんですよ。一時間くらいで戻ってくるけど。

美波 じゃあ、その頃また伺います。

一穂 別の日にしてもらえますか？ 今日忙しいんですよ。

美波 三〇分でもいいので、お時間いただけませんか？

一穂 祈るんですか？

美波 ……？

一穂 申し訳ないけど、僕、神様ってゼロコンマーパーセントも信じてないから。

美波 違います！ 宗教じゃありません。

一穂 じゃあなんでしょう？

美波、哀しそうな表情で立ち尽くしている。

一穂 よかったら上がってください。

美波 え？

一穂 これ、変なこと考えて言うんじゃないんですよ。時間を短縮するために提案してるんですよ、食べながら聞きますから、よかったら上がってください。

美波 ご迷惑じゃないですか？

一穂 そりゃ迷惑ですよ。でも未成年の人からお願いと言われれば無視できないです。未成年でしょう？ 浪人されてますか？

美波 十九歳です！

一穂 とにかく話は聴きますよ。子どもは社会の宝。話は食べながら聞きますから、どうぞ上ってください。

美波 …すみません。おじゃまします。

一穂 どうぞどうぞ。

一穂と入ってきた美波、遠慮がちに部屋を確認する。

一穂、美波に座る位置を示し、再びキッチンへ向かう

美波 あの……一人で住んでるんですか？

一穂 なんて？

美波 すごく片付いてるから… やっぱベッドがないと広いですね！ でもお布団出すのめんどくさくないですか？

一穂 布団、出さないもん。

美波 出さないんですか？

一穂 使わないいで。

一穂、スムージーが入った容器とグラスを持ってきてテーブルに置く。グラスにスムージーを注ぎ、美波の前に差し出す。

一穂 今日のはね、人参とリンゴに生姜が入っててなかなかいけるよ。

美波 自分でつくったんですか？

一穂 うん。

美波 (両手を合わせ) いただきます。

美波、スムージーを一気に飲み干し溜息をつく。

一穂、美波が飲む間にキッチンへ戻り、今度はヨーグルトの入った皿を持って戻り、美波の前に置き、自分も腰を下ろす。

一穂 もしよかったら自家製ヨーグルトもどうぞ。上にかかっているのはココナッツオイルです。

美波 (一口食べる) 美味しいです！ こんな初めて食べました。

一穂 よかった。

美波はヨーグルトを、一穂は残りの朝食を食べながら会話を続ける。

美波 やっぱ都会ですよ。隣同士でも半年ぜんぜん顔を合わさらないなんて。なんか緊張します。

一穂 引越し蕎麦もらったでしょう？ 今時引越し蕎麦っていうのも珍しいからよく憶えてますよ。

美波 えー 珍しいんですか？

一穂 初めて貰いました。

美波 ここは無難に引越しソバとかタオルにしとけて親に言われたんですよ。私は地元の珍珠の詰め合わせがいいと思ったのに…

一穂 珍味ってどんなの？

美波 カツオの生節とか… ゴリの佃煮とか…

一穂 ナマブシって生なの？

美波 生じゃないです。鰹節なんです。

一穂 じゃあ鰹節じゃない。

美波 削ってないんですよ。かたまりというか…

一穂 どうやって食べるの？

美波 そのままです。スライスして… お醤油の味がついてるんで。ガーリックとか塩とかもあります。

一穂 どこから来たんだっけ？

美波 太平洋とかじゃないですか？

一穂 太平洋から来たの？ 日本語うまいね。

美波 私ですか！ 鯉かと思った。

一穂 僕、鯉の出身地、聞きそうに見えますか？

美波 ちよっと見えます。私は高知です、四国の…

一穂 高知？ 坂本龍馬だ！

美波 それ、こっちに来て一〇〇回くらい言われてます。

一穂 六ヶ月で一〇〇回か… 一、八日に一回だから、ほぼ二日に一回？ 本当ですか？

美波 ……

一穂 二日に一回言われるかなあ…

美波 気持ちとしてはってことです。

一穂 気持ち？

美波 実際はもつと少ないですけど、一〇〇回くらい言われたような気持ちというか…

一穂 ああ気持ちですね。

美波 みんな坂本龍馬しかないみたい…

一穂 ほかにもあるよ。よさこい祭り。最後の清流、四万十川！

美波 (嬉しそう)

一穂 まだあるよ。やなせたかし、アンパンマンミュージアム！

美波 よく知ってますね！

一穂 讃岐うどん！

美波 それは香川です。

一穂 高知じゃないの？ 高知でしょう？

美波 違います。

一穂 でも坂本龍馬も食べてたよね、讃岐うどん…

美波 食べたかも知れませんが…

一穂 龍馬がうどん食べてる銅像あるよね？

美波 知りません。

一穂 テレビで見たことあるんだよ。

美波 讃岐の国のうどん、讃岐うどん。香川県です。

一穂 なんて月曜休みだって知ってたの？

美波 え？

一穂 さっき、今日お休みですよって言っていましたよね。

美波 いつも月曜日に洗濯物干してあるんで…

一穂 たしかに。それで、お願というのは？

美波 そうなんです…

一穂 なんか緊張してきたよ。若い子にお願いされたことなんてないからさ、ドキドキするよね。

美波 そんな難しいことじゃないです。
一穂 うん。

美波 あの私、今日これからデートなんですネ。

一穂 奇遇だねー 実は僕もなんです。

美波 えっ…

一穂 あれ大学は？ ダメだよ、サボっちゃ！

美波 まだ夏休みです。

一穂 もう十月だよ。

美波 大学はそうみたいです。

一穂 そうか、ごめんね。俺、高卒だから。それで？ これからデートに行くよ。

美波 そうなんです。それもわりと山場っていうか… 今日は彼の部屋に誘われてて…

もしかすると、もしかするかも… みたいな？

一穂 もしかするともしかするかも… あ、そういうことか！（納得）どのくらいお付き合いを？

美波 三ヶ月くらいです。

一穂 三ヶ月でもう山場なんだ！ そうか、今はそういうものかあ… 十九歳だよね？

お父さん、いくつ？

美波 四十四です。

一穂（驚く）おんなじ！ そうかあ…ということは二十五の時の子どもなんだよな… 二十五つていうと俺は…

美波 シヤワー貸してください！

一穂 シヤワー？ 壊れたの？ 管理会社に電話した？ もうつながるかな？

美波 私、十一時くらいには出なきゃいけないんで！

一穂 いいよ。

美波 ホントですか？

一穂（反射的に）嘘だと思うの？

美波 思いません。最近の若者の、あまり褒められない受け答えです。

一穂 わかってるんだ。失礼だっというんだよ、兄が。ホントですか？ っていう受け答えは疑ってるのかって。

美波 ……

一穂 よかったよ、風呂はゆうべ念入りに磨いたからさ、今ピッカピカだよ。

美波 几帳面なんですね。

一穂 今日は梨々子さんが来るからね。梨々子さんというのは、お付き合いしている人です。

美波 奇遇ですよね！

一穂 それもわりと山場っていうか、もしかしたらもしかするかも…みたいな。

美波 初めてなんですか？

一穂 初めてじゃない。ウチに来るのが初めてだから。（時間を見る）よし急ごう！ 造りは同じだから使い方はわかるよね。僕は買い物に行くから、その間にゆっくり使ってください。

あつという間に食卓を片付け、外出用の帽子を被りエコバッグを持った一穂、玄関に向かう。

一穂 石鹸もシャンプーもリンスも好きに使っていいからね。
美波 ……ダメです。

一穂 もしかして敏感肌？ 僕もそうなの。うちのは全部オーガニックだから、たぶん大丈夫だよ。バスタオルは全部おんなじだから上から順番に使ってね。

美波 待つてください！

一穂 大丈夫、百パーセントオーガニックコットンだから。片側はガーゼになってるの。

美波 そうじゃなくて…

一穂 シャワー使いたいでしょ？

美波 出かけないでください！

一穂 大丈夫。内側から鍵かけていいよ。帰る時はそのままでもいいから。

美波 ここにいてください！

一穂 ごめんね、買い物があるんだ。特製カレーの材料。知ってる？ キタキツネの…

美波 十分でいいです！

一穂 慌てなくていいよ。肉屋と花屋に寄るから。あとケーキ屋も。

一穂、出て行こうとする。美波、追いつがる。

美波 一人じゃ入れないんです！

一穂、状況を把握しきれない。

美波 キモイですよね… すみません。でも怖いです。怖くて入れないんです。狭くて窓のないお風呂場って狭い箱みたいで息がつかまって… 怖くて入れないんです。

一穂、部屋に戻り、座るように美波を促す。

一穂 お風呂に入れないってことですけど、春から、どうしてたんでしょうか？

美波 時々銭湯に行つて…

一穂 じゃあ銭湯に…つてまだ開いてないか。

美波 すみません！

一穂 っつて、トイレはどうしてたの？

美波 ドア開けたままです。でもお風呂ほど怖くないです。

一穂 じゃあシャワーもドア開けてればいいんじゃないの？

美波 裸になるとダメみたいで… 何度もやってみたんです。ちよつとなら大丈夫な時もあるんですよ。すごく元気な時とか、すごく酔っぱらってる時とか…

一穂 それ危ないよ。

美波 そうなんです！ お風呂の手すりのところに顔面ぶつけちゃって、そんな死に方したくないって思ったんです。それに今日は髪も洗いたいし…

一穂 あのさ、これ、貸すのが嫌で言うんじゃないんだよ。いいんじゃない？ 一日くらい入らなくても。

美波 一日じゃないんです。

一穂 どのくらい？

美波 五日くらい。

一穂 五日？

美波 だって… 銭湯に行けない日だったんですよ。

一穂 サークル？ バイト？

美波 私、量が多くてすごく重いんです。

一穂 ……

美波 毎月、すごい出血なんです。

一穂 そうか、そういうことか！ そういう時は銭湯に行けないんだ。女の人って大変だね。

美波 タンポンなら大丈夫らしいですよ。でもなんか怖くて…

一穂 その辺のことは解りかねるのですが…でもどうする？ そのお付き合っている彼の部屋に泊まることになったら！

美波 そうなんです。

一穂 その人、銭湯の息子ならよかったのにね。

美波 そうだったとしても、まだ開いてないです。

一穂 一緒に入ってもらえばいいのか？

美波 できませんよ！

一穂 困るよなあ… 女性から一緒に入って言うのもなあ… どうかかな？ いいのかな？ 最終的にはその人の好みによるよね。

美波 絶対変な子だと思われまますよね？ 何度もやってみたんです。大丈夫、なんでもない、ただのお風呂なんだから、ちよつと狭いだけで… でもダメなんです。真っ白い箱の中で真っ白い天井や壁を見ると胸が苦しくなるんです。苦しくて不安でおまけにカーテン開けると便器があるし… 苦しくて悲しくて叫びたいような気持ちになるんです。

一穂 オカシイですよ？ お風呂に入っただけでそんなになるなんて… キモイですよ？ 私、オカシイんです。変態なんです！

一穂、美波を見つめている。

一穂 おかしくないです。オカシイって言う人には言わせておけばいい。ぜんぜん問題ないです。人は多かれ少なかれそういう部分を持っているんです。

美波 そういう部分？

一穂 もしかしたら自分はちよつとオカシイのかも知れないって悩んでしまうような部分です。でも、ぜんぜん大したことじゃないんです。

美波 鈴木さんもありますか？ オカシイところ。

一穂 あります。だから、そんなに哀しまないでください。

空気が和らぐ。

一穂 でも俺が一緒に入るわけにはいかないよなあ… どうしてもと言われたら入らないこともないけどさ。ちよつとまずいか…

美波 そこまでの覚悟はできていません。

一穂 最近リビドーが減退してるから、たぶん大丈夫と思うけど方が一つでもあるし… 海パン履くか？

美波 考えたんですけど… ドアは開けたままで、鈴木さんは（キッチンと部屋の境あたりに移動して）こちらへんに座ってもらえませんか？ 背中向けて。それで、ずっと話しかけてもらえれば、なんとか大丈夫かと思うんですよ。

一穂 あのさ、これ、変な意味で言うんじゃないんだよ。もっと近くの方がいいんじゃない？ 背中向けるんだし。

美波 わかってます。でもここでいいんです。この辺だとちゃんと見えますから。あんまり近いと、それはそれで緊張しますから… やつぱり…

一穂 そうか。よし、やってみよう！

一穂、椅子を所定の位置へ持つていく。

美波、ふと視線を感じたような気がして、ベランダの方を振り返る。

美波、誰もいないことを確認し、バスルームへ向かう。

一穂、椅子に腰かける。シャワーの流れる音。

一穂 湯加減どうですか？

美波 イイ感じです。

一穂 田舎のお風呂はそんなに広いの？

美波 そんなでもないです。この三倍か四倍くらい。でも窓から田んぼが見えて、その先に海が見えるんですよ。

一穂 気持ちよさそうだねー

美波 気持ちいいですよー

一穂 トイレは？

美波 トイレは普通の大きさです。

一穂 そうじゃなくて、ドアは閉めるの？

美波 開けたままです。

少しの間。

一穂 あのさ、ちよつと聞きたいんだけどね。

美波 はい。

一穂 ケーキなんだけど、こういう時はどう買えばいいのかな？

美波 こういう時って？

一穂 彼女が初めて部屋に来る時。やっぱり丸ごと買うものなのかな？

美波 ワンホールってことですか？

一穂 そう、ワンホール！好きなケーキ、聞いとけばよかったよな… 失敗したな…

美波 小さいのをいくつか買う方がいいと思います。

一穂 いくつかって、いくつ？

美波 鈴木さんは、ケーキ好きですか？

一穂 俺？ わりと好き。かなり好き。

美波 じゃあ、五個くらい。

一穂 ゴゴ…って五つ？

美波 五個は五つです。東京は違うんですか？

一穂 東京でも五個は五つだよ。

美波 よかった！

一穂 でもそんなに食べられないでしょ？

美波 女の子はそういうの嬉しいんですよ。

一穂 女の子じゃないけどね。

美波 そういうこと、ゼツタイ言っちゃダメですよ！

一穂 だれに？

美波 彼女にです！

一穂 だって四捨五入すると四十だよ、たぶん…。

美波 そのくらいが一番ビミョーなんです。

一穂 そうなの？

美波 もう女の子じゃないから…とか言いつつ、心はすごく女の子だったりしますからね。

一穂 わかった、気をつける。

美波 四十でも五十でも女の人はそういうの嬉しいんですよ。

一穂 食べ放題が？

美波 選べるってことです。

一穂 三つじゃだめなの？ 選べるよ。

美波 醍醐味が薄いんですよ。五個くらいあれば贅沢感があるし、なんか大事にされてる気がします。

一穂 じゃあ十個くらい買おうか？

美波 そんなにあると気味悪いです。

一穂 (感心) そういうことかあ… わかった。五つ買うよ。美波ちゃんはどうなケーキが好き？(返事がない)イチゴの？ チョコレート？ どうせ余るから、ごちそうするよ。どんなのがいい？

美波の憐れな叫び声とともに、暗転。

明るくなると、服を着替え、眼鏡をかけた美波がいる。
何度か呼び鈴が鳴るが、無視する美波。

気がつくくと、すぐ側に古城梨々子が立っている。

梨々子 こんにちは。

美波 なんて入ってくるんですか？

梨々子 何度もチャイム鳴らしたのよ。人の気配がするのちつとも出て来ないから…
鍵だつて開いてたのよ。

美波 だから入って入って来ますか？

梨々子 ごめんなさい。悪いとは思ったのよ。でもこうしないとほんとうのことがわから
ないと思つて… ごめんなさいね。

美波 夕方じゃなかったんですか？

梨々子 よかったあ！ 妹さんだったのね！ 話してくれて嬉しいわ！ 私、ちよつと
疑つてたのよ。もう二年近くつき合つてるのに、一度も招待してくれないんですもの。

彼が誰と住んでるのか知りたかつたのよ。

美波 やっぱりそうなんですわね。鈴木さん、誰と住んでるんですか？

梨々子 やだ、あなたも鈴木さんでしょう？

美波 私は…

梨々子 最近の人つてそういうのあるわよね。私の友達の息子も、友達つて同じ劇団の後
輩なんだけど… 彼女の息子も母親のこと「みきちゃん」って呼ぶの。変でしょう？ で
もなかなか可愛い子でね。高校生くらいになったら一緒に歩いて、恋人同士に見せたい
らしいの。凶々しくない？

美波 ……

梨々子 カズホさんと一緒に住んでるんですのね？

美波 住んでません！

梨々子 妹さん…じゃないの？

美波 (咄嗟に) 一緒には住んでいません。

梨々子 近くに住んでいるの？

美波 かなり近いです。

梨々子 そう、よく遊びにくるのね。カズホさんは？

美波 近くに出かけてます。

梨々子 お買い物？

美波 あたしがシャワーでコンタクトを流しちゃったんで、それで…

梨々子 あら大変！ それで買いに行ってくれたの？

美波 大丈夫だつて言ったんですけど、支度してここで待つてなさいって、あつという間
に行つてしまつて…

梨々子 (満足そうに微笑む) これからお出かけ？

美波 はい、ちよつと…

梨々子 でもどうして話してくれなかったのかしら？

美波 (ほぼ同時に) どうしてそう思つたんですか？

梨々子、女優のようにニッコリ微笑んで譲る。

美波 どうして鈴… 誰かと住んでいるって思ったんですか？

梨々子 だって二年近く付き合ってるのに…

美波 部屋に呼んでくれなかった？

梨々子 そうなの。

美波 でもそれでどうして、誰かと住んでるって思うんですか？ それだけでそうは思いませんよね？ 呼びたくないのは部屋が異常に汚いからかも知れないし、逆にものすごい潔癖症だとか、危ないDVDを山ほど持ってるとか、色々あるじゃないですか？

梨々子 だって感じるのよ。

美波 感じる？

梨々子 気配を感じるの。電話で話してるでしょう？ 誰かが傍にいるような、そんな気配を感じるの。何度もよ。

美波 声とか聞えます？

梨々子 (首を振る) ううん、でも確かにカズホさんは、その人を気にしてる、気にしながら私と話している、そう感じるの。私、そういうカンはいいのよ。ウソとかもすぐわかっちゃうの。浮気とかも… 時々もう少し鈍感になりたいって思うわ。

美波 鈴木さん浮気したんですか！

梨々子 しないわよ。(きっぱり)彼は嘘をつかない人だもの。だから、女だって決めてたわけじゃないのよ。彼、優しいから、例えば誰か知り合いが居候してるなんてこともあり得るわけだし…

美波、梨々子を観察するように見つめている。

梨々子 どうかした？

美波 二十世紀ストレンジヤーの古城梨々子さんですよ？

梨々子 カズホさんから聞いたの？

美波 五月の公演観ました！ 大学の先輩に小劇場ブリークみたいな人がいて無理やり連れて行かれたんです。でもすごく面白かったです！

梨々子 ありがとう。

美波 小劇場のアイドルって言われてたんですよ？

梨々子 あの頃はたくさんいたのよ、そういう人。私なんか、その端っこの隅っこの方にいただけ。で、真ん中の正面で輝いてた人たちが廃業したり、結婚して引退したり… 亡くなったりもして、もう残ってないからめずらしいだけよ。

美波 でもコアなファンがいますよね？ こないだもそういうオジサンたち見ました。握手してください。(手を差し出す)

梨々子 (握り返す) ありがとう。

美波 結婚するんですか？

梨々子 まだわからないけど。

美波 梨々子さんて、座長の喪守羅(もすら)さんとデキてるんですよ？ 先輩が言っていました。小劇場の事情通なんです。もうほとんど内乱の妻だって。

梨々子 ナイランの妻？

美波 結婚してないけど一緒に暮らしてるって。

梨々子 内縁の妻でしょ？

美波 ナイエン？

梨々子 内緒にするの内に縁があるの縁。事実上は夫婦として暮らしながら、法律上の婚姻に至らない男女の関係。

美波 なーんかおかしいとは思ってたんですよ。

梨々子 そういう時は辞書をひきなさいね。内乱はおかしいですよ。

美波 すみません。そうか、内縁の妻、なんですね！

梨々子 私は違うわよ！ ただの噂よ！

美波 そうなんですか？ ほんとうに？ 付き合ったこともない？

梨々子 付き合ったことはあるけど…

美波 別れているんですね？

梨々子 当たり前でしょ！ 私そういうの、二股とか大嫌いなもの！

美波 あーよかった！ 安心しました。

梨々子 私行かなくちゃ… カズホさん帰ってきちゃう！ 私が来たことは内緒にしてね。一時にまた来るから。

梨々子、出て行こうとする。美波、慌てて追いかける。

美波 梨々子さん、どんなケーキが好きですか？

梨々子 ケーキ？

美波 苺シヨートとかタルトとかレアチーズとか…

梨々子 どれも嫌い。洋菓子は苦手なの。

美波 えー！

梨々子 とくに生クリームがダメ！ 餡子は大好きなだけだね。またゆっくり会いましょう。じゃあね！

梨々子出て行く。

美波 やばい。二年も付き合ってたんでわかんないのよー どうしよう… 肉屋と花屋と

ケーキ屋… 肉屋と花屋とケーキ屋… 肉屋と花屋とケーキ屋…

美波、再び玄関に向かおうとしたところで、鈴木一徹が姿を現す。向かい合う二人。

一徹、大いに慌てているのだが、言葉遣いはあくまで丁寧である。

一徹 たいへん失礼致します。私は鈴木一徹という者ですが、こちらは鈴木一穂（いっすい）という者の部屋ではないでしょうか？

美波 イッスイ？

一徹 表札も鈴木一穂と出ていましたし、鍵も開いていたものですから、弟が近所にも行っているのだろうと推測し、入ってきてしまいました。失礼ですが、貴方様は最近、引越して来られたのですか？

美波 えーっと… 今年の四月に。

一徹 誠に申し訳ありません。弟が東京へ出て四半世紀になりますが、初めて訪ねたものですから… 大変な無礼をしました。どうかお許しください。では…

一徹 深々と頭を下げ去ろうとする。

美波、慌てて引き留める。

美波 すみません！ ここ、鈴木さんの部屋です！ どうぞ上ってください。お兄さんなんでしょうか？

一徹 兄です。

美波 上がってください！ あれイッスイって読むんですか？ カズホさんだと思ってました。

一徹 もしかすると弟はカズホと名乗っているのかも知れませんが、戸籍上はイッスイと読みます。亡き父が名付けました。おそらく孤灯一穂から付けたと思われる。

美波 イッスイさんは、買い物に出かけています。私がコンタクトを流してしまったので…

一徹 コンタクトレンズを？

美波 そうなんです、コンタクトレンズです。すみません！ そろそろ戻ってくると思います。スムージーでも飲んでいてください。すごく美味しいですから！

美波、キッチンへ行き、スムージーをグラスに注ぎ、持って来て一徹の前に置く。

美波 有名な方なんですか？

一徹 誰がですか？

美波 小林一茶みたいな…

一徹 孤灯一穂は四字熟語です。

美波 すみません！

一徹 あまり使われませんからね。

美波 コト… 孤島？

一徹 島ではありません。灯（トウ）はともしび、あかりですね、ひへの灯です。

美波 どういう意味ですか？

一徹 孤灯というのは、たった一つ、ぽつんと灯っている「ともしび」のことです。穂は、稲の穂のようなものを数える時に使います。したがって、一穂は一つということ。つまり、孤灯一穂は孤独で寂しい様子を表すたとえです。

美波 ……鈴木さんにピッタリの名前ですね。

一徹 弟は寂しそうですか？

美波 すみません！（スムージーを勧めて）飲んでください。すごく美味しいですから。

一徹 どうぞおかまいなく… 急に上京してきたこちらが悪いのですから。(美波を見つめて)ところで…

美波 私は、隣に住んでいる山岡美波と申します。

一徹 隣に？ そうでしたか(スムーズにをながめて)噂には聞いておりますが、口にするのは初めてです。(恐る恐る口をつける)美味しいです！ お若いのに料理も上手なんですね。

美波 つくったのはイッスイさんです。すみません。私の所のお風呂が壊れてしまいました、ちよっと拝借していただきます。…なんかしゃべり方がヘンになってきた。お兄さんて、なんか丁寧なしゃべり方しますよね？

一徹 よくそう言われます。国語の教師の端くれとして丁寧に話すよう心がけています。

美波 先生なんですか！

一徹 今がっかりしましたね？

美波 (明らかにうろたえている)

一徹 ヤマオカミナミさんでしたね？

美波 記憶力いいですね！

一徹 長年、生徒の名前を憶えていますから…

美波 なるほど。

一徹 ヤマオカは「山あり谷あり」の山に、岡山の岡ですか？

美波 スゴイ！ その通りです！

一徹 それなら岡山の山に岡山の岡でいいわけです。突っ込みどころです。

美波 すみません。

一徹 ミナミさんはどのような漢字を書かれますか？

美波 はい。美しい波と書きます。

一徹 山の向こうに美しい波… 美しい名前です。両親に感謝しなくてはなりませんね。

美波 はい。

一徹 きっと美波さんは海の近くで生まれたのですね。

美波 四国の高知です。

一徹 土佐の國ですね。

美波 そうです。一穂さんは讃岐うどんって言ったんですよ！

一徹 お恥ずかしい。

美波 あの、質問してもいいですか？

一徹 何なりと。

美波 お兄さんは、高知と聞いてまず何を思い浮かべますか？

一徹、しばし目を閉じ思い浮かべる。

一徹 ……二十七日(はつかあまりなぬか)。大津(おほつ)より浦戸(うらど)をさして漕ぎ出(い)づ。かくあるうちに、京(きやう)にて生まれたりし女子(をむなご)、国にてにはかに失(う)せにしかば、このごろの出(い)で立ちいそぎを見れど、何(なに)こともいはず。京へ帰るに、女子(おむなご)のなきのみぞ悲しび恋

(一) ふる。(※)

美波 (絶句している)

一徹 紀貫之の『土佐日記』です。

美波 …なるほど。

一徹 では、美波さんは埼玉と聞いて、まず何を思い浮かべますか？

美波 埼玉ですか？

一徹 埼玉です。

美波 関東です。

一徹 たしかに。

美波 東京の隣の県です。

一徹 その通りです。

美波 さいたまスーパーアリーナ！

一徹 あります！

美波 彩の国芸術劇場！

一徹 すばらしい！

美波 さいたま大根！

一徹 埼玉でも大根は獲れますが、とくに名の知れたものではありません。

美波 ホントですか？

一徹 嘘だと思いませんか？

美波 (思い出して) ホントだー！

一徹 本当です。——ところで、美波さんはいくつになりますか？

美波 わたしは十九歳になります。

一徹 十九！(考え込む) まあ、良しとしましょう。四捨五入すれば二十歳です。二十歳

なら大人です。一穂は暮れに四十五になります。あなたのご両親が許してくださるかど

うか心配ですが… 私も高知にご挨拶に伺いましょう。

美波 (慌てて) 違います！さっきも言いましたけど、お風呂を借りていただけなんです！

一徹 お風呂が壊れたからって、十九歳の女の子が隣の中年男に「すみません、お風呂貸

してください」なんて言いますか？ 言うわけないでしょう？

美波 でも、でも、そうするしかない事情があったら…

一徹 どんな事情があれば、非常識です！ そんな奴は頭のネジが緩んでイカれてる。

美波 ……

一徹 私は三十年近く中学校の教員を務めました。多感な年頃の子どもたちは色々と非常識な行動をするものです。ある程度はそれも仕方ありません。迷って迷って成長する時期なのです。しかし、十九歳にもなって親類でも恋人でもない男の部屋で風呂に入るなんて、そんな行動をしたら何が起こるかわかりませんよ。危険極まりない… 殺されたって文句も言えないですよ！

美波 ……

一徹 (微笑) 誤解しないでください。私は怒っているわけではないんです。むしろ喜んでいきます。一穂は見合い話にもまったく興味を示さなかったものですから、かなり本気で心配していたんです。もしかすると女性に興味がないのかも知れないと…

美波 (咳く) そんなことはありません。

一徹 そうでしょう。あなたのような方がいたことは、実に喜ぶべきことです。ほんとうに心から嬉しい！ しかし、あまりにお若いので、正直なところたいへん戸惑っていろいろわけです。(恐る恐る) 失礼ですが、あなたの父上はおいくつですか？

美波 四十四です。

一徹、大いに落胆するが、気を持ちなおそうと努める。

一徹 大丈夫、誠意を尽くして話せばきっとわかってもらえます。三人で高知へ行きましょう！

美波 ……

一徹 美波さん、近くに酒屋はありますか？

美波 お酒ならコンビニで買えますけど…

一徹 (落胆) コンビニエンスストアですか… それも仕方ないでしょう。資本主義社会ですからね… 祝い酒を買ってきます！

一徹、出ていく。

美波、ぼつんと佇む。ふと気配を感じ、訝しげにベランダへ近づくなか、陽が暮れるように暗転。

【第2場】

同日の夕刻。

一穂の買って来た花が、花瓶ではないもの(例えば大鍋、洗面器)に活けられている。

梨々子はキッチンで珈琲を入れている。

一穂 引っ越しの挨拶以来、話したことなかったんだから、よつぽど切羽詰まっていたんだと思うよ。

一徹 ……

梨々子 カズホさん、カップは？

一穂 そこに結納返しの箱あるでしょ？

梨々子 (箱を見せて) これ？

一穂 従妹の結婚式で貰ったの。(一徹に) ヤスコさんの時の、兄き使ってる？

一徹 ヤスコちゃんって… 二十年くらい経つんじゃないか？

一穂 九月だったから、丸十八年だね。(思い出して) あん時の叔父さんの泣き方すごかったよなー 兄き使ってる？

一徹 使ってるかな… どうだろう？

一穂 せっかく貰ったのに、ひどいな。

一徹 ……

梨々子、珈琲を運んで来て、一穂と一徹の前に置く。

一穂 俺、美波ちゃんの父親と同じ年なの。あのくらいの娘がいてもおかしくないんだよなあ…… あり得ないよ。

一徹 (うなだれる)

一穂 窓のない箱みたいなの風呂に入るのが怖いんだって。可哀そうにな、自分のことおかしんじゃないかって悩んでるんだよ。

一徹 うわあー！

梨々子 どうしたんですか？

一徹 頭のネジが緩んでイカレてるって言ってしまった！

一穂 泣いてたんだぜ、あの子。

一徹 殺されても仕方ないと言ってしまった！

梨々子 大丈夫ですか？

一穂 嫌だねえ、そんな画一的な見方しかできないなんて。

梨々子 でもお兄さんだって悪気があったわけじゃないんだから。嬉しくって勘違いしちゃったんだから……

一徹 そうなんです。急に都会に来て、冷静さを失っていたんです。

一穂 いくつだよ。

梨々子 久しぶりなんですか？ 東京は。

一徹 最後に来たのは大学で同期だったやつとの結婚式で…… 十五年近く前です。

梨々子 ここに来たのは？

一徹 初めてです。

梨々子 (一穂に) 埼玉なら近いのにね。

一穂 ぜんぜん近くないよ。乗り継ぎ悪いと三時間もかかるんだから。

一徹 いつでも行けると思っていると、案外行かないものです。

一穂 会う理由もないしね。

梨々子 あなたは東京の人だとばかり思ってた。時々は帰ってるんでしょ？

一穂 ……

一徹 最後に帰って来たのは今年の秋です。父親が亡くなったので。

梨々子 去年？ (一穂に) お父さん、去年亡くなられたの？

一穂 うん。

梨々子 去年のいつ？

一穂 九月の終わり。午前四時九分。ちょうど月曜日で仕事が終わったんだよな。

一徹 不満そうに言うんじゃない。

梨々子 一周忌だったんですね。

一徹 先週無事に済ませました。

梨々子 (一穂に) どうして言ってくれなかったの？

一穂 そんな特別なことじゃないし……

梨々子 特別なことでしょうか？ 親が死んだのよ。

一穂 八十八だよ。長患いしたわけでもなく、死ぬのに相応しい年齢だよ。誰にでも親はいるし、たいてい子どもより先に逝く。人間年を取れば必ず死ぬ。年を取らなくても、死んでゆく人は死んでゆく。

梨々子 でも、やっぱり話して欲しいわよ。お付き合いしてる人の親が亡くなったのよ。話すのがふつうだと思うわ！

一穂 だって「ご愁傷さまでした」とか形式的なこと言われて、なんて言ったらいいのかわからないもん。

一徹 イッスイ、お前は…

一穂 (梨々子に) ごめんね。

一徹 お前はそういう考えで、盆休みにも一週忌にも帰ってこなかったのか？

一穂 休みが取れなかったんだよ。

一徹 親の一週忌に休ませてもらえないような職場なのか？

一穂 人手不足なんだよ。

一徹 親の葬式に日帰りするほどか？ 東京の、区立の図書館はそんなに人手が足りていないのか！

一穂 なんだよ、その言い方…

梨々子 じゃあ形式的でなければいいの？「八十八なら死ぬのに相応しい年ね。一穂さんのお父様がそんな風に亡くなって私も嬉しいわ」って。

一穂 そうだね。そんな風に言ってもらえるなら話せばよかった。

梨々子 お父さんと上手くいってなかったの？

一穂 ……

一徹 弟は父親が四十五の時の子どもで、父は子煩悩でしたが、仕事で家を空けることが多く、どちらかと言えば親子の時間は少ないのです。

梨々子 お忙しい方だったんですね。

一穂 調子に乗ってたんだよ。チャホヤされて…(一徹に) よけいなこと言うなよ。

一徹 結婚を考えているなら、ある程度の家庭環境を話しておくのは当然のことだし、大切なことじゃないのか。(梨々子に) 私が小学校の三年生の時、父が再婚したんです。

義理の母は結婚式の時はもうお腹が大きくて(笑) すぐに弟が生まれました。

梨々子 そんなに離れてるの？(二人を見比べ) 見えない。

一穂 教え子に手をつけた。

一徹 葉子さんはもう卒業していた。(梨々子に) 父は大学で中国文学を教えていたんです。

梨々子 大学で…

一徹 私の母が病気で亡くなって、父がとてつもなく落ち込みましてね、それをを氣遣つて、ちよつとした家事の手伝いに来てくれたのです。家庭教師として私の勉強も見てください。

梨々子 ヨウコさんというんですか？

一徹 そうです。

梨々子 おんなじ！

一徹 なにがですか？

梨々子 私も陽子です！

一徹 リリコさん… ですよ？

梨々子 梨々子は役者の時の名前、本名は陽子なんです。田中陽子。

一徹 そうでしたか！

梨々子 どんな字ですか？ 私は太陽の陽と書いて陽子です！

一徹 母は、葉っぱの子と書いて葉子です。

梨々子 (一穂に) 私の本名、知ってるわよね？

一穂 ……

一徹 すごい偶然です！ 母親が葉っぱの葉子、妻は葉っぱを照らす太陽の陽子！

一穂 (呆れる)

梨々子 お兄さんってロマンチストなんですね。

一徹 ちなみにリリコさんはどんな字を書くのですか？

梨々子 梨々子の「り」は梨です。

一徹 なし？

梨々子 果物の梨。

一徹 梨ですか。(感心する)なるほど、イメージにピッタリですね。下の「り」は？

梨々子 下の「り」も梨です。

一徹 梨が二つ！ 梨がお好きなんですね。

梨々子 (一穂に) それで、お母様はお元気なの？

一穂 ……

一徹 亡くなって、もう二十六年になります。

梨々子 二十六年！

一徹 一穂が高校生の時でした。

一穂 十七歳だった。

梨々子、ふと視線を感じてベランダの方を振り向き、さりげなく近づく。

一穂 どうかしたの？

梨々子 (ベランダの窓から隣室を伺い)美波ちゃん、まだ帰ってないみたいね。

一穂 帰ったら呼びに行くよ。

一徹 美波さんには申し訳ないことをしましたが、梨々子さんにお会いしてほっとしました。またとない良縁です。一穂が見合いないわけだ。(一穂に)できるだけ早いうちに梨々子さんのご両親にもご挨拶しないと。

一穂 それはできない。

一徹 反対されてるのか？

梨々子 私、両親はもういないんです。

一徹 ご両親とも？

梨々子 はい。母は、私が大学を卒業するころ病気で亡くなりました。

一徹 そうですか。まだお若かったですか？

梨々子 四十一です。

一徹 お気の毒に。お父様は？

梨々子 父は、生きていますと思いますが、どこにいるのか… 私が小学校の時に離婚したんです。

一徹 そうでしたか。

梨々子 でも母の実家がわりに裕福だったんで、とくべつ苦労したわけでもないんですけどね。

一徹 ご兄弟は？

梨々子 一人っ子なんです。

一穂 いいよな、さっぱりしてて。羨ましいよ。

一徹 イッスイ！ そういう言い方はよくない。(梨々子に) 月並みですが、それはずいぶんと心細かったことでしょう。よくがんばりましたね。

梨々子 だからお芝居…というか劇団にのめり込んだのかも知れません。あのころは私が一番若かったんで、みんなよくしてくれました。家族みたいに。帰る所がなくなつた私にとつて、劇団が唯一の居場所のように思えて…

一徹 無理ありません。

呼び鈴の音。一穂、慌てて玄関へ走る。

その一瞬、梨々子と一徹の視線が合い、梨々子は恥じらうように目を逸らせる。

一穂 おかえり。大丈夫だったの？

美波 昼間は色々にご迷惑をおかけして、すみませんでした。梨々子さん、ケーキはダメだって言ってたんで、豆大福買ってきたんでどうぞ。

一穂 悪かったね。(梨々子に) 大福買ってきてくれたって。

梨々子 (出迎えるようにキッチンへ) ありがとう。

一穂 上がって一緒に食べようよ。

美波 (梨々子に) よかったら…(一穂に) コンタクト買い取ります。ほんとにすみませんでした。

一穂 いいから上がりなよ。

梨々子 上って。一穂さんのケーキもあるし。

一穂 とにかく入って。話したい人もいるから。

一穂、美波を促しドアを閉める。

梨々子 大福と珈琲って合うのよねー

一穂 そうなんだ。

梨々子 でもこんなひどい目に遭って気を遣うことないのに。

一徹 (落ち込む)

美波 (ご迷惑かけちゃったんで…)

梨々子 (一徹に気づいて) ごめんなさい。(美波に) 珈琲入れましょうね。

一穂 (美波に) ミルクないけど、牛乳入れる？
美波 入れます。

一徹、美波に頭を下げる。

一徹 美波さん、申し訳ありませんでした。事情を知らなかったとはいえ、誠に心無い言葉をお口にしておあなたを傷つけてしまった。

美波 ……

一穂 安心していいよ。もう誤解はとけてるから。

一徹 謝ってすむことではありませんが…

美波 お兄さんが悪い人じゃないってわかりますから、大丈夫です。(一穂に) 全部話しちゃったんですか？

一穂 ごめん、成り行き上。

美波 やだなー恥ずかしいなー

一徹 恥ずかしい。私は教師として本当に恥ずかしい。

梨々子、コーヒーを運んで来て美波の前に置く。

やはり誰かに見られているような気配を感じ、周囲を見回す。

一穂 どうかした？

梨々子 (一穂に) ううん…

一穂 デートは行ったの？

美波 行きました。

一穂 コンタクトなしで？ 大丈夫だった？

美波 すみません、せっかく買いに行ってもらったのに。

一穂 そんなことはいいよ。この時間帰って来たってことは…

美波 お泊りは断りました。

一穂 大丈夫だったの？

美波 大丈夫じゃないです。っていうか、なんかウダウダズケウジウジ言ってくるんでめんどくさくなって、別れちゃいました。

一同、啞然。

一穂 ウダウダ…

梨々子 ズケズケ…

一徹 ウジウジ…

その内容を想像する一穂、梨々子、一徹。

一穂 別れちゃったんですか？

美波 はい、キツパリと。
梨々子 そんな簡単に別れちゃっていいの？
美波 いいんです。三ヶ月しか付き合っていないし。
梨々子 三ヶ月？
一徹 三ヶ月でお泊り：
一穂 悪かったね。
美波 なんでイッスイさんが謝るんですか。イッスイさんは悪くないですよ。
梨々子 ねえねえ、イッスイさんって何？
美波 (含み笑い) 梨々子さんもカズホさんって言ってますよね。
梨々子 カズホさんだもの。
美波 ほんとうは、カズホじゃなくてイッスイって読むんですよ。鈴木イッスイ。
梨々子 えー？
美波 びっくりですよ。
梨々子 (一穂を見つめる) 鈴木イッスイ？
一穂 カズホでいいんだよ。アニキが何度も呼んでるのに、今ごろ気づいたの？
梨々子 かけ声とか方言かと思ってた。
一徹 方言？
美波 かけ声？
一穂 (笑っている)
梨々子 だってお兄さん「イッスイ、お前は」って怒ってるから「オイこらっ！」みたいなものかなって(言いながら笑いだす)
美波 方言っていうのは？
梨々子 そういうのあるでしょ？「おぬし」とか呼びかけるときのこと…
一徹 「おぬし」は同輩以下の相手に用いる代名詞で、方言ではありません。
美波 (合点して) 高知だと「おまえ」のこと「おまん」って言います。
一穂 おまん？(発音がちがう)
美波 「おまん」です。
梨々子 そうだ、言ってた！
美波 高知に行ったことあるんですか？
梨々子 福山雅治が言ってた。
一徹 『龍馬伝』ですね。
一穂 旧いなー
美波 イッスイ！
一穂 なんだよ。
美波 イッスイ！
一穂 うるさいよ。
梨々子 イッスイさん：
一穂 なに？
梨々子 イッスイさん？
一穂 だからなに？

梨々子 一休さんみたい。

美波、一徹、爆笑。

一穂 小学校の時言われてたよ。

梨々子 でも、いい名前だわ。

一徹 父が名付けました。

一穂 (美波に) 今日じゃなければうまくいったのにね。うちに人が来るなんてほとんどないのに、よりによって…

一徹 ほんとうに申し訳ない。

美波 いいんです。そもそも彼が好きっていうよりバージンをなくしたいって気持ちの方が強かったんで。

一穂、梨々子、一徹、絶句。

一徹 なくしたかったですか？

美波 二十歳になる前に。

梨々子 そんな理由で？

美波 なんか、年を取るほど重くなるっていうか… うつとおしいじゃないですか。

一徹 うつとおしい！

梨々子 ねえ、今ってそんな風なの？

美波 (頷く) 友だちもみんな言ってます。この人ならいいかって思える人が現れたら、さっさと捨てちゃった方がいいって。

一穂 そういう考えもあるか…

梨々子 (二穂に) ないわよ！ (美波に) そんな考えはダメ。別れてよかったわ。これは大事にしなきゃいけないことなの！ そもそも捨てるもんじゃないから！

美波 (気圧されて)…はい。

梨々子 キレイごとじゃなくて、ほんとうに好きな人とした方がいいのよ。

美波 でも、ほんとうに好きな人がずっと現れなかったらどうすればいいんですか？

一穂 そうだよなあ。

美波 すごく好きな人に出会ったとしても、エッチできるとは限らないじゃないですか？結婚してるかも知れないし、振り向いてもらえないかも知れないし…

一徹 そうですねえ。

梨々子 大丈夫！ ちゃんと生きてれば、そういう人に出会うから。

一穂 そういうもんかな。

梨々子 とにかく今はそう思って生きて。自分の体を守れるのは自分だけなんだから。今はわからないかも知れないけど、乱暴に扱うと、後になってどんどん心をすり減らすことになるの。

美波 (頷く)

一徹 その通りです。

美波 (一徹に) よかったですね。先生は高知に行かなくて大丈夫です。
一徹 ほっとしました。

美波 (一穂に) いつ結婚するんですか？

一穂 いって…

一徹 いやー楽しみだなあ！ 甥っ子とか姪っ子とかできるかなあ…(梨々子に) ずっと憧れてたんですよ。

一穂 勝手なこと言うなよ。

梨々子 そんなに若くないんで、不安もあるんですけど…

一徹 前向きに取り組んでいただければ充分です。これで鈴木家も存続できる可能性が出てきました。

美波 今っているんな方法がありますもんね。

一徹 きっと大丈夫ですよ。

梨々子 できる限りがんばります。

一穂 無責任なこと言うなよ！ 圧力かけないでくれよ。

一徹 圧力なんてかけてない。期待しているだけだ。

一穂 そういうの、うっとうしいんだよ。

一徹 じゃあ、「どうぞもう子供もできないだろうけど、それもいいさ。夫婦二人だけの暮らしもいいと思うよ」って言えばいいのか？

一穂 いいんじゃない？

一徹 どうしてお前はそうひねくれてるんだ！

硬く黙り込む一穂。

梨々子、一穂の様子を気にしている。

美波 ハヤシさんが行つた病院がいいみたいですよ。

梨々子 ハヤシさん？

美波 ハヤシマリコさんです。

一徹 (頷く) ルンルの…

梨々子 なんでそんなこと知ってるの？

美波 担当の美容師さんがリコちゃんの友だちで…

梨々子 リコちゃん？

美波 イシダさんの奥さんの…

梨々子 ああ…

美波 リコちゃんも通つたららしいですよ。

梨々子 なんかみんな友だちみたいなのね。

一穂 嫌なんだよ。

一徹 何か言いたいんだよ！ 嬉しいんだから。

一穂 子どもは嫌なんだよ！

大声に驚く梨々子と美波。

一徹 (美波に)きみはもう自分の部屋に帰りなさい。

美波 ……

一徹 これは非常にデリケートでプライベートな話だからね。

美波 繊細で個人的なお話ですね。そうですね。

美波、帰ろうとする。

梨々子 待つて！ 私は居てくれた方が嬉しいわ。(美波に)ほら、男女同数の方が落ち着くから。

一徹、戸惑う。

美波、一穂を見る。

一穂 おれも居てくれた方がいいと思うよ。客観的な視点は大事だよな。

梨々子 そうよね。

美波、一徹を見る。

一徹 それでは、山岡美波さんには同席していただくことに決定いたしました。

一穂 (一徹に)いいの？

一徹 これが民主主義というものだ。

美波、安心したように腰を下ろす。

梨々子 (一穂に)子ども嫌いだったの？

一穂 嫌いじゃない。むしろ好きだよ。かなり好きかも知れない。でも自分の子どもは欲しくない。

梨々子 じゃあどうして結婚するの？

一穂 じゃあ、子どもを持つために結婚するの？

梨々子 ……

美波 イツスイさんはどうして結婚しようと思ったんですか？

一穂 梨々子さんと一緒にいたいからだよ。ずっと一緒にいたいからだよ。当たり前のことだよ！

美波 ごめんなさい。

梨々子 どうしたの？

一穂 なにが？

梨々子 どうしてそんなに怒ってるの？

一穂 怒ってないよ。

梨々子 カズホさんらしくない。(一徹に) すみません。呼び慣れないんで、もうしばらくはイッスイではなくカズホさんと呼ばせてください。

一徹 お気遣いなく。

一穂 俺らしいって？ 梨々子さんの考える俺らしいって何？

梨々子 ……

一穂 例えばどういうの？

梨々子 例えば、いつも冷静で落ち着いていて、精神的にも自立していて、なんでも器用に見える人。

一徹 すごいな。そんなに立派になったのか。

梨々子 映画とか芝居はヘンなものが好きだし、ものの見方はちょっと変わってる。けど、人に対しては公正で公平。嘘をつかない人。

一穂 買いかぶってるよ。

梨々子 今日だって、美波ちゃんのことこんなに思いやって… そんな人が子どもは欲しいくないなんて納得できない。

一穂 俺だって納得できない。子ども欲しかったの？ 梨々子さんから子どもの話なんて

一度も聞いたことないんだけど。

梨々子 ……

一徹 彼女は奥ゆかしいんだよ。

美波 梨々子さん、子ども、欲しいんですか？

一徹 そりゃあ欲しいですよ。

美波 先生には聞いてません。

間。

一穂 (真摯に) 梨々子さん、子ども、欲しいですか？ そうなんですか？

梨々子 (真摯に) 私、子ども、欲しいです。子どもを産んでお母さんになりたいです。

それで自分の家族を作りたいです。

一穂 ……

一徹 とても健全な考えです。

美波 (挙手) はい！

一穂 どうぞ。

美波 それってセクハラじゃないでしょうか？

一徹 そういう意味ではありません。

一穂 健全なんて言葉を使う人間、いちばん信用できないね。

一徹 そうじゃない。子どもを持ちたいと思うのは自然なことだと…

一穂 じゃ俺は不自然なんだな。

美波 (挙手) はい！

梨々子 どうぞ。

美波 さっきの「鈴木家が存続できる可能性が…」とかいうのもビミョウな発言だと思います。

一穂 圧力かけてるよな。

一徹 梨々子さん、気を悪くしたなら謝ります。子どもを産まない、産みたくないという女性を非難するつもりは毛頭ないんです。

梨々子 わかっています。大丈夫です。

美波 (挙手) はい！

一穂 どうぞ！

美波 先生がどういう意味で言ってるかが問題じゃなくて、相手にどう伝わるかが問題なんです。

一穂 いいこと言うなー

美波 (照れる)

梨々子 なんかすぐく気が合ってるのね。

美波 (梨々子に) でも劇団はどうするんですか？

一徹 出産休暇と育児休暇を取って、少し落ち着いたら復帰すればいいんです。

美波 (呆れる) さすが公務員。

一穂 世間を知らないよな。

美波 先生、小劇場ってご存じですか？

一徹 知ってますとも！ 観たこともありますよ。

梨々子 ほんとですか？

一徹 一番前の席に座っていたらタクアンが飛んで来たんです。あれはビックリしたなあ
：

梨々子 (笑いたいが、うまく笑えない)

一穂 俺はさ、さっき梨々子さんが言ったような俺が、家の中のことやなんかもやって、

梨々子さんは芝居を続ければいいと思ってた。梨々子さんもそうしたいんだと思ってた。

梨々子 ……

一穂 芝居はどうするの？ やめるつもり？

美波 まさか！ あんなにスゴイのに…

一徹 そんなにすごいんですか？

美波 スゴイです。

一穂 やめられないでしょう？

梨々子 芝居はやめます。家庭に入ります。

一穂 ……

一徹 梨々子さん、ありがとう！

美波 もつたいない！

一穂 兄きがヘンなこというから…

一徹 変なことではない。

一穂 舞台の上の梨々子さんを見たことがないからそんなことが言えるんだよ。芝居をやめさせるなんて…

一徹 本人がやめると言ってるんだ。

一穂 無理してるんだよ。兄きが追い詰めたから。

一徹 そんなことはしていない。
一穂 無自覚なんだよ！

一徹 お前にも温かい家庭が必要だ。

一穂 余計なお世話！ 人を子供みたいに言うな！ そんなに欲しけりや自分が結婚していくらでも子どもつくればいいだろ！

梨々子 カズホさん！

一穂 兄ぎがその気になれば相手がいらないわけないだろ！

一徹 お前はなんにもわかってない。

一穂 なにがだよ！

一徹 ……

一穂 都合が悪くなると黙るんだ。

一徹 俺だって努力はした。その気になって探したよ。見合いもしたし、相談所へも通った。年収だって悪くないし、家だってある。多少偏屈な舅はいるが一応大学教授だ。結婚できないわけないと思ってたよ。俺は、葉子さんが死んだのはオヤジのせいだとは思ってない。お前と違ってな。でも世間の奴らから見たら…

一穂 (遮る)俺は、小さな劇場でスポットライトを浴びて、全身から熱を発しているよ。うな梨々子さんを見て好きになった。彼女から舞台を取り上げるなんて考えられない。

少しの間。

梨々子 カズホさん、私が舞台に立たなくなったら、もう私と結婚する気はないの？

一穂 ……

梨々子 役者の私と結婚したかったの？

一穂 ……

美波 (なにかの気配を感じ)今、なにか聴こえませんでした？

一同、耳をすませるが、なにも聴こえない。

美波 (梨々子に)そういえば、ここにいるヒトのことわかりました？

梨々子 (首を横に振る)

一徹 ここにいるヒト？

一穂 なんのこと？

美波 梨々子さんは、イッスイさんが誰かといっしょに住んでるんじゃないかと疑って、早めに様子見に来たんですよ。

梨々子 疑ってるんじゃないの！ 確かめたかっただけ。

一穂 なにを確かめるの？

梨々子 あなたが誰と住んでいるのか。

一穂 だから、美波ちゃんは隣の子だよ。

美波 私じゃなくて、時々ここに来てるヒトのことです。

一徹 へー そんな友だちがいるのか？

一穂 来ないよ、誰も。

梨々子 お友だちが遊びに来てるでしょう？

一穂 ここに来る友だちなんていない。ここに来ない友だちもない。ややこしいな…
とにかくここには誰も来ないよ。

梨々子 …でも私と電話で話す時、そばに誰かいるでしょう？

一穂 いないよ。いるわけないでしょ。

梨々子 私、怒らないから本当のことを教えて欲しいの。

一穂 本当のことだよ。なんで怒られるの？ 何を言ってるの？

梨々子 (混乱)

美波 あの、ほんとうに誰も来てないんですか？

一穂 誰が来るの？

美波 友だちとか、知り合いとか…

一穂 だから、友だちなんていない。知り合いはいるよ。図書館の同僚とかなじみの利用者さんとか、ジムのトレーナーとか… でもここには来ないよ。ここに来るのは…

美波 でも…

一穂 生命保険の人が来る！ 一年に一度、ちゃんと見直ししてくれるいい人なんだ。そうだ、兄き。俺が死んだら入る一千万、今は兄きを受取人んだけど、結婚したら梨々子さんに変えるよ。いいよね？

一穂 当然だろう。

美波 でもイッスイさん、時々誰かと話してますよね？ 私聞いたことあるんです。ベランダで誰かと話してるの。一度や二度じゃありません。

梨々子 そうよね。私は聞いてないけど、誰かいると感ずるの。電話の向こうに、あなたの他に誰かがいる。

美波 今日の朝だって話してましたよね？ 最近太ったとか、食欲があるのはいいことだとか…

一穂 (警戒して) 何でそんなこと知ってるの？ この壁、そんなに薄くないよね。

梨々子 ベランダにいれば聞こえちゃうんじゃない？

一穂 ベランダにいるのなんて見たことない。

一穂 一穂、どういふことなんだ？

一穂 なんかわかおかしいと思ってるんだ。何を探ってるの？

美波 ……

一穂 よく考えたらおかしいよね。梨々子さんが来る日にわざわざ入ってくるなんて…
梨々子 それはお風呂に入ってデートに行きたかったからでしょ？

一穂 すぐ別れちゃうような相手だよ。別にキャンセルしたっていいじゃない？

一穂 たしかに。

一穂 たまたま二十世紀ストレンジャーの公演を観てたっていうのも…

一穂 出来過ぎているような…

一穂 十九の女子大生が観るような芝居じゃないでしょ。

梨々子 失礼ね！ 十代の子だって観るわよ！ あたしのファンじゃないけど…

美波 ごめんなさい！ 小劇場フリークの先輩は架空の人物です。梨々子さんの公演には

一人で行きました。鈴木さんのお付き合いしている人が、二十世紀ストレンジヤーの梨々子さんだつていうのがわかつて： ホームページを見て行つたんです。

梨々子 モスラのことは誰に聞いたの？

一徹 モスラ？

美波 熱狂的ファンのオジサンです。

一穂 よくわからないんだけど、つまり君は俺んちのベランダに潜んで梨々子さんの情報を得ようとしていたつてことなの？

美波 聴きたかったんです。聴きたかっただけなんです！

梨々子 何を？

美波 大学に入って友だちができなくて： 誰とも話ができなくて。鈴木さんが誰かに話しかけてるのを聴いてると自分が話かけられるような気持になつて： ホツとして： ベランダでずっと聴いてたんです。

梨々子 そうだったの。

梨々子、ベランダを気にしている。

一穂 ぜんぜん気が付かなかつた。ベランダにいたんだ？

美波 (うなづく)

一徹 (一穂に)誰に話してるんだ？

一穂 誰でもないよ。

一徹 独り言なのか？

一穂 独り言じゃない。

梨々子 あ！

美波 なんですか？

梨々子 今なんかいた！

美波 なんかつて？ ゴキブリ？

梨々子 ゴキブリじゃない。もっと大きいの。

一徹 そうか、ペットか！ お前なに飼つてるんだ？

美波 ハムスターとか？

一穂 ペットじゃない。

梨々子 あ、いた！

一徹 どこですか？

美波 いた！

梨々子 あそこです。葉っぱの下。

美波 動いた！

一徹 ヤモリです！

一穂 ヤモリじゃない。

美波 トカゲじゃないですか？

梨々子 トカゲ！

一徹 トカゲだ！

一穂 (小声で叱る) トカゲトカゲってうるさいよ！ トカゲだよ。
美波 また動いた！

一穂 そりゃ動くよ、生きてるんだから。

梨々子 (小さく奇声をあげる)

一穂 しっ！ 静かにして。怖がるから。

梨々子 ……

美波 もしかして… もしかしてトカゲと話してたんですか？

一穂 そうだよ。

一穂 お前はトカゲと住んでるのか？

一穂 そうだよ。

美波 「今日は天気がいいから散歩に行こうか」とか「今晚ちよつと遅くなるよ、ごめんね」とか… あれみんなトカゲに話してたんですか？

一穂 そうだよ。いけないの？ なんか問題ある？

梨々子と一穂、やや戸惑っているが、美波は喜々としている。

美波 キモッ！

一穂 キモイって言うな！ 俺はその言葉が大嫌いなんだよ。

美波 これをキモイと言わなくて、何をキモイと言うんですか。

一穂 簡単にキモイキモイって言い過ぎなんだよ。なんだよ！ ほかの奴らだって、犬や猫と話してるだろ。ジャマくさい洋服まで着せてさ、ゼツタイ嫌がってるよね。あんなの虐待だよ。「よくできましたねー」とか「おいちいでちゅか？」とか小さい子どもみたいに話しかけて、俺から見ればよっぽどキモイよ！ 病んでるよ。なんでトカゲと住

んでるだけでそんなに変態みたいに言われなきゃいけないんだよ！

美波 住んでるだけって…トカゲと住んでるんですね？

一穂 そうだよ。

美波 トカゲを飼ってるんじゃないかって、トカゲと住んでるんですね？

一穂 そうです。

美波 変態です！

一穂 梨々子の前に頭を伏せる。

一穂 梨々子さん、申し訳ありません！ すべて私のせいです。

梨々子 ……

一穂 なにやってんの？

美波 先生って、土下座好きですよね。

一穂 一穂がこんな風になってしまったのは私のせいです。ほんとうに申し訳ない！

一穂 なに言ってるの？

一穂 あの時、私がちやんと守ってやればこんなことにはならなかったんです。

一穂 やめろよ。

梨々子 あの時って？

一徹 (一穂に向き直り) 葉子さんが原因なのか？ そうなんだな？

一穂 その話は今はしたくない。

一徹 今はって… じゃあいつ話すんだ！

一同、黙り込む

一穂 うるさいよ。

一徹 お前、ずっと話さないじゃないか。二十七年間ずっとだ。俺はずっと待っていた。いつかお前から話してくれると思って。

一穂 ……

一徹 自分の子どもが嫌だというのも、葉子さんのことと関係あるんじゃないのか？

一穂 関係ないね。

美波 (梨々子に) 葉子さんって？ 元カノとか？

梨々子 一穂さんのお母さま。

一徹 (梨々子に) 葉子さんが死んだとき、誰も家にいなかったんです。夏休みで私が帰ればよかったですけど、部活動の引率やら研修会やら駆り出されて、一穂はホームステイでオーストラリアへ行くことになって。父も急に中国へ行くことになって…

一穂 オヤジがいなくなるってわかってたら、短期留学なんて絶対行かなかった。興味なかったんだ。それをアイツが、若いうちに外の世界を見た方がいいとかシツコクいいやがって… 母さんは一人にしちやいけなかったのに…

一徹 母さんが死んだのはお前のせいじゃない。

一穂 オヤジのせいだよ！

一徹 違う。あれは誰のせいでもないんだ。

一穂 わかった風なこと言うな！

一徹 オヤジも悩んだんだ。お前だって知ってるだろう？ あの年、あんなひどいことがあって、オヤジの友だちも逮捕された。中国でお世話になった人にも殺された人がいたんだよ。オヤジはどうしても行かなくてはならなかった。葉子さんを連れて行くことさえ考えていた。わかるだろう？

一穂 ……

美波 (トカゲを見て) なんか、こっち睨んでないですか？

梨々子 (見る) ホントだ。

美波 睨んでますよね。

一穂 睨んでない。

梨々子 睨んでる。

一穂 もともとそういう顔立ちなんだよ。

一徹 (見る) 睨んでいます。

一穂 みんなで見るなよ。恥ずかしがるだろ！

トカゲ、人間たちの方へ向かってくる。

奇声をあげ、逃げまどう梨々子と美波。女性を守ろうとする一徹。

一徹 やめて！ 怖がるから。静かにして！ やめてくれ！

「トカゲ？」「トカゲ……」「トカゲ！」と囁く声、呟く声、叫ぶ声……
無数の声が一穂に襲いかかるなか、暗転。

同日の真夜中、寝袋に入った一穂、トカゲに話かけている。

一穂 今日は疲れたね。楽しくない盆と正月がいつぺんに来たみたいだったね。怖かったね。疲れたでしょう？ 大丈夫？ 今夜は明るいな。満月かな。違うね、ちよつと欠けてるね。

トカゲが動いている音が微かに響くなか、暗転。

【第3場】

翌朝。一穂、二人分の朝食を整えている。

一穂、いつものようにトカゲに話しかけようとするが、うまく言葉が出てこない。

一穂 夏が終わったね。——夏が終わると秋だね。

いつの間にか、身支度を整えた一徹が一穂を眺めている。

美しい初秋の朝、これほど穏やかで柔らかな光に包まれているのに、どうしてこの光景はどこか淋しいのだろうか？ と思いつつながら。

一穂 秋が終わると冬だよね。

一徹 冬には冬眠するだろう？

一穂 朝メシは？

一徹 昨日帰る予定だったから、すぐ出なくてはいけないんだ。

一穂 その気になれば三分で食べられる。

一徹 (食卓を見て) いただくよ。そのトカゲ、冬の間はどうするんだ？ そこじや寒いだろう。

一穂 ケージの中で冬を越すよ。

一穂、植込みから少しだけケージを見せる。

一徹、大いに驚き、嬉しそうにうなづく。

一徹 寒くはないのか？

一穂 寒いよ。でももともと外にいるものだから平気だよ。

一徹 あれから思い出したよ。トカゲ、母さんも好きだった。
一穂 なんてわかる？
一徹 昔、まだ赤ん坊のお前と俺と三人で散歩に行つて、葉子さんがトカゲやらカエルやら捕まえてお前に見せるんだよ。俺は怖くて（笑）彼女は見かけによらず、平気で捕まえてた。
一穂 ……
一徹 それにしても… この部屋には本がまったくくないんだな。本はどうした？ あんなに好きだったじゃないか。
一穂 本はずつと好きだよ。でも図書館で借りられる。借り放題だからね。
一徹 確かに。

少しの間。

一徹 お前は頑張つた。高卒で働きながら資格を取つて図書館に勤めて。よく頑張つたよ。やつぱり母さんが図書館好きだったからか？
一穂 ……
一徹 ここまで家に寄り付かなくなるとは思わなかったけどな。
一穂 あの町にいたくなかった。母さんのことを聞かれるのも話すのも嫌だった。誰も知らない所でひっそりと生きたかった。
一徹 ほんとうに、よく頑張つたよ。少ない給料の中からオヤジに仕送りまでして。
一穂 仕送りじゃない！ 返済だ！
一徹 （こぼれる笑顔）やつぱりそうか。これは養育費を返しているつもりなんだろうなつてオヤジ笑つてたよ。

一徹、一穂の前に封筒を差し出す。

一徹 一周忌に渡すつもりでいたんだけどな。お前の名義の通帳と印鑑が入っている。五百万ある。
一穂 いらないよ。
一徹 お前が稼いだ金だ。オヤジもいずれ渡すつもりだった。
一穂 オヤジに返した金だ。
一徹 オヤジはもう使えない。
一穂 墓石にでもすればいい。
一徹 オヤジの墓は母さんと同じ墓だ。母さんが喜ぶと思うか？
一穂 ……
一徹 ようやく傍に行つてやれるつて喜んでたよ。
一穂 ……
一徹 そんなにオヤジが許せないか？
一穂 俺は自分が許せない。
一徹 梨々子さんのことを考えろ。お前のことだから貯金もあるだろうが、図書館司書の

給料は安い。あの時、大学図書館へ就職しておけばなあ。

一穂 アイツのコネなんか使えるか。

一徹 警備の仕事もしているっていうじゃないか。

一穂 もう辞めたよ。最近は何時まで開館してるからね、ダブルワークも難しいんだ。

一徹 じゃあなおさらだ。結婚してから必要になるかも知れない。梨々子さんのことを考えろ。

一穂 でももう、俺と結婚する気はないかも知れない。

一徹 布団、新品だったな。梨々子さんが来るから買ったのか？

一穂 いちおう… あった方がいいと思ってる。

一徹 悪かったな、俺が使ってしまった。

一穂 いいよ別に。

一徹 よく話し合うんだ。ああは言ったが、年齢的に考えても子どもができるとは限らない。子どもがいなくなったらって幸せな家族を築くことはできる。お前と梨々子さんは似ているような気がする。きっと大丈夫だ。

一徹が去り、ぼつんと残された一穂。

小さな森は墓のようでもあり、一穂はまるで墓守のようにそこに佇んでいる。

その夜。

天の高いところから注ぐ満月に照らされた部屋は、まるで夜の森を抜けた先にある小さな広場のように見える。

一穂、広場の中央にポツンと腰かけている。

トカゲに話しかけようと思うが、言葉が出てこない。

電話が鳴る。

森の奥に、梨々子の姿が浮かびあがる。

一穂 もしもし。

梨々子 もしもし、私。

一穂 うん。

梨々子 昨日はごちそうさまでした。カレー美味しかった。

一穂 うん。

梨々子 やっぱりもう一度会って、ちゃんと話した方がいいと思ってる。

一穂 うん。

梨々子 来週の月曜日、お昼にいつもの所へ来てくれる？

一穂 来週でいいの？ 休み取れるよ。

梨々子 来週でいい。

一穂 ……

梨々子 色々考えたいこともあるし…

一穂 うん…

梨々子 カズホさんにも、考えて欲しい。

一穂 ……わかった。

梨々子 じゃあ…

一穂 あのさ！

梨々子 ん？

一穂 今も感じるの？

梨々子 ……

一穂 俺のそばに誰かいるって、今も感じる？

梨々子 感じるわ。

一穂 ……

梨々子 でもね、それが嫌というわけじゃないの。

一穂 トカゲだってわかったから？ 安心したの？

梨々子 (小さく笑う) それはそれで気になるけど。そうね、むしろ一穂さんのことが少しわかって、色々納得できたような気もするの。

一穂 納得ってどういうこと？ 色々って？ 例えばなにを納得したの？

少しの間。

梨々子 ……あなたと初めて泊まった時にね…

一穂 うん。

梨々子 私、言ったのよ。

一穂 うん。

梨々子 ……

一穂 なんて言ったの？

梨々子 二人でいる時は、梨々子じゃなくて陽子って呼んで欲しいって。憶えてる？

一穂 (苦しい) うん。

梨々子 もう何年も陽子って呼ばれてなかったから、呼んでほしかったんだけど、カズホさんに「梨々子っていう名前を持って現れたあなたが好きだから、梨々子って呼ばせて欲しい」って言われて、嬉しくなって「じゃあそうしてください」って言ったの。馬鹿みたいね。

一穂 馬鹿じゃないよ、梨々子さんは。

梨々子 ありがとう。でも馬鹿なのよ。自分の人生は、どんな役を演じるよりずっと、ずっと、ずっと難しい。

一穂 どうしたの？ なんのこと？

梨々子 私ね、太陽の陽子を生きたくなくなったのかも知れない。

一穂 ……

梨々子 イッスイさん。

その一瞬、一穂は遠い思い出にさらわれそうになる。

イッスイ——温かな女性の声で二十六年ぶりに呼ばれた名前。

洪水のように押し寄せる狂おしく懐かしい思い出に飲み込まれそうになるが、

梨々子の言葉を受け止めようと踏みとどまる。

梨々子 あなたはきつと、亡くなったお母さまと一緒にいるのね。

一穂 ……

梨々子 トカゲにはお母さまの思い出があるんじゃないかしら？ 違う？

一穂 ……

梨々子 当たった？

一穂 梨々子さんは鋭いなあ。

梨々子 (小さく笑う) そうなの。もう少し鈍くなればいいんだけど。

一穂 ……

梨々子 教えて。

一穂 なにを？

梨々子 どんな思い出？

一穂 ……

梨々子 ごめんなさい。言いたくなければいいの。

一穂 違う。そうじゃない。

一穂、なかなか話し出すことができない。

梨々子 私のお父さんね、料理が得意だったの。

一穂 うん。

梨々子 よくホットケーキとかドーナツとか作ってくれてね。

一穂 うん。

梨々子 すごく読書家で、よく寝る前に読んでくれたの。小川未明とか小泉八雲とか…

一穂 そうなんだ。

梨々子 だからね、離婚した、お父さんとお母さんはもう一緒に暮らさないんだって聞か

されても、二度と会えなくなるなんて考えもしなかった。

一穂 どこにいるか、全然わからないの？

梨々子 父はね、好きな人ができて出て行ったのよ。

一穂 ……

梨々子 母にしてみれば二度と会いたくないだろうし、祖父たちも私に会わせたくなかつたんでしょね…でもお父さんのこと大好きだったから、哀しかったな。

少しの間。

一穂 母親は、もともとは明るい人だったんだけど、俺が小学校に入ったくらいから、

時々ひどく塞ぎ込むようになって、入院したこともあったんだ。

梨々子 そう…

一穂 それがたいていオヤジがない時で…

梨々子 お父様が留守がちじゃ大変だったんでしょね。

一穂 そうでもない。兄きはもう高校生だったし、母方の祖母が泊まってくれたりして、俺はけっこう楽しかった。子どもだったんだよね。

梨々子 子どもだもん。

一穂 俺が中学のころから、夜中に出かけるようになったんだ。

梨々子 夜中に？

一穂 本人は散歩だと言ってたけど、あれも徘徊っていうのかな。

梨々子 原因は、わかったの？

一穂 やっぱり淋しかったんじゃないかな。親父がいなくて。友だちにも会えなくなっ
て。

梨々子 淋しいって言えなかったのね。

一穂 そういう人じゃなかった気がする。でもわからない。そんな単純なことじゃなく
て、もつとなにか： ふつうは見えないものを見ているような気がした。

梨々子 心配だったでしょう？

一穂 うん。時々こっそり後をつけたりもした。でも母さんは必ず帰ってきたし、散歩に
行くと元気そうだったんだ。

梨々子 どうして夜中なのかしら。

一穂 息がね：

梨々子 イキ？

一穂 息が、呼吸が楽になるって言った。たぶん病気のせいなんだろうけど、人よりも
植物の方が自分に近く感じるんだって。まるで自分も木とか花とか虫とか、そういうも
のに近い存在になったみたいで落ち着くんだった。近所のキャベツ畑にもよく行って
た。誰もいない時間に。長いこと見てたな：

少しの間。

一穂 母さんは人への関心を失ってるみたいだった。

梨々子 あなたのことも？

一穂 俺に対してはずっと優しくかったよ。家のなかのことができなかったり、ずっと哀し
そうだったり、何日も全然しゃべらなかったりもしたけど。

梨々子 そう。

一穂 ある時、母さんが小さなトカゲをポケットに入れて連れて帰ってきたんだ。まだ眠
っているのを起こしてしまっただか言って：よくわからないんだけど。

梨々子 トカゲが好きだったのかしら？

一穂 すごく大事にしてたよ。ほんとうに会話してるみたいに見えた。俺が高校に入って
からは落ち着いてきて、あの年は春から元気そうだったんだ。少し会話も増えて、空港
にも見送りに来てくれて……。なんかさ、俺が家にいなかったから、母さんは散歩に出
たまま帰って来られなくなったんじゃないかな。そんな気がするんだ。

梨々子 ……

一穂 よく母の夢をみる。母がいなくなっただからずっと： 決まって夜の森を散歩してる

んだ。淋しそうでも哀しそうでもなく、むしろ楽しそうに、踊ってるみたいに。でも僕は話しかけられない。母は、母を見つめている僕を感じている。でも話しかけてはこない。絶対に。ずっと夜の森を散歩しているんだ。

少しの間。

梨々子 たぶん：きつとあなたは、人のぬくもりや思い出を排除したようなその部屋で、お母さまの面影と思いだけを大切にして、トカゲに話しかけているのね。

一穂 そうだったら：もし、もしそうだとしたら、どう思う？ そんな俺をどう思う？ 梨々子さんはどんな気持ちになる？

梨々子 苦しい。

一穂 くるしい？

梨々子 でも愛おしい。

一穂 ……

梨々子 一七歳のあなたを抱きしめてあげたいような、愛おしくて、苦しい気持ちになる。

一穂 ……

梨々子 じゃあ月曜日に。

電話が切れると、一瞬のうちにすべては森の闇に包まれる。勢いよく雲が流れ、一穂は明け方の森の出口にいる。

一七歳のあの日以来、たびたび夢の中に現れる母親が、森の中を散歩して歩き疲れたように帰ってくる。

彼女は靴を履いていない。

しかし、よく見るとそれは梨々子である。

一穂、濡らしたタオルで慈しむようにその足を拭く。

一穂、その足を柔らかな乾いたタオルで包み込むように拭く。

梨々子、名残を惜しむように、一穂を見つめる。

その指が一穂に触れ、その腕が一穂を強く抱きしめた時、森の出口が閉じられようとしている。

梨々子、出口の向こうへ一穂を思いきり突き飛ばした、その瞬間、ほんとうの闇に包まれる。暗転。

【エピローグ】

翌年の春。

ペランダの緑が濃く、日差しが柔らかく差し込んでいる。

一穂、帰宅したばかりの様子で、礼服の上着をハンガーにかけたり、荷物を出したりしているが、その動作はいつもより緩慢で、ぼんやりとしている。

玄関で呼び鈴が鳴る。

一穂 開いてるよー

美波、入ってくる。

美波 おかえりなさい。早かったですねー

一穂 始発に乗ったから。

美波 始発！

一穂 どうしても泊まれてるさだから一泊したけど、することないし。

美波 この上、アテられてもね…… お式はどうでした？

一穂 盛大だったねー 美波ちゃんからのお祝い、ちゃんと渡したからね。すごく喜んでたよ。

美波 そうですか。よかった。

一穂 ヨーグルト食べる？

美波 (嬉しそう) 食べます。

一穂、台所へ行き、ヨーグルトを持ってくる。

一穂 (ヨーグルトを美波の前へ置く) どうぞ。

美波 いただきます。(食べながら) いつもながら美味しいですね。

一穂 それはよかった。

美波 イッスイさん、ホントにこれでよかったんですか？

一穂 よかったんじゃない？

美波 ……

一穂 まあ驚いたけどねー

美波 驚きましたよ！ 私の人生で一番驚きました。

一穂 そんなに？

美波 どんな気持ちですか？ 恋人だった人がお義姉さんになるって…

一穂 女の人は切り替えがスゴイよね。かなわないよ。もうすっかりアネキって感じだもん。

美波 さすがは元小劇場のアイドルと呼ばれた女ですね。

一穂 週刊誌の見出しみたいだね。

美波 二十世紀ストレンジャーの人たちも来てました？

一穂 梨々子さん側の客はほとんどそうだよ。

美波 喪守羅さんも？

一穂 うん。さすがのスピーチだったね。二十歳で天涯孤独になった梨々子さんがどんなふうの小劇場のアイドルになっていったか、さんざん笑わせて、最後はみんな感動して泣いてる人もいた。

美波 ふうん。……赤ちゃん、いつ生れるんですか？

一穂 十月の後半。兄きのコネで式場取れたけど、もう少しでお腹が目立ってくるって焦ってたみたい。

美波 イツスイさんって、意外にオトナなんですね。

間。

一穂 俺、そういうの苦手っていうか、かなり鈍いらしいんだけど、今、君はイヤミを言っただよね？

美波 そうはつきり聞かれても…

一穂 そうか、そういう感じか…

美波 ごめんなさい。

一穂 ごめんごめん。…あつちの人は細かいことは知らないし、みんな大喜びだよ。東京からきれいなお嫁さんが来たって。

美波 そうでしょうね。でもほんとうにいいんですか？

一穂 なにが？

美波 梨々子さんのこと好きだったんでしょう？

一穂 仕方ないよ。彼女が俺を選ばなかったんだから。

美波 あーもうイライラする！ 言ってもいいですか？

一穂 いいよ。

美波 イツスイさんは知らないでしょうけど、梨々子さんはずっと喪守羅さんの内縁の妻みたいな人だったんですよ。たぶん付き合ってたのは梨々子さんがまだ学生のころで、喪守羅には奥さんがいたんです。

一穂 知ってるよ。

美波 知ってました？

一穂 昔、劇団の打ち上げに参加したこともあるし、わりと有名な話だからね。

美波 梨々子さんが人気が出たころ喪守羅が離婚したから、周囲はてつきり梨々子さんと再婚すると思ってたらしいんですけど…

一穂 喪守羅は若手女優と浮気ばっかりして…

美波 ……

一穂 いい人なんだけど女好きの病気だよね、喪守羅さん。

美波 なにノンキなこと言ってるんですか！ 喪守羅のせいで梨々子さんは腹いせにイツスイさんと結婚しようとしてたんですよ！

一穂 それも知ってる。

美波 ……知ってたんですか？

一穂 俺、そんなに鈍く見える？

美波 見えます。

間。

一穂 喪守羅には娘がいるんだよね。そうじゃなかったら、結婚したんじゃないかな、喪守羅と。

美波 ……

一穂 彼女は、誰かと結婚して、今の生活から抜け出したいと望んでいた。だったらその相手は俺でもいいんじゃないかって思ったんだ。そうすればもつと芝居に専念できるし……

美波 でも、梨々子さんは役者をやめちゃった。

一穂 俺がぜんぜんわかってなかったんだよ。梨々子さんは、結婚して母親になることを望んでいた。俺はその希望を叶えてやれない。二年も付き合っただけで、そのことに気づいてもいなかった。だからこれでいいんだよ。

美波 よくそう物分りよくなれますね。信じられない！

一穂 そう思うのは、君が若いからだよ。

美波 ……

一穂 人が幸せになれそうなチャンスはね、そう何度もあるもんじゃない。今だ！ と思っただけに行かないで。

美波 だから梨々子さんは、クリスマスに三時間かけて埼玉のお兄さんところに行っただけで、お兄さんを押し倒して子どもをつくったってことですか？

一穂 それは知らない。どっちが押し倒したかは……

美波 どっちでもいいです。

一穂 案外兄きかもなあ……あと、三時間はかからない。二時間四十分くらい。

美波 あーなんかムカムカする。

一穂 大丈夫？ ちゃんとご飯食べてる？

美波 ビミョウですけど、ここでスムージーとか自家製ヨーグルトとか食べてるから大丈夫ですよ。

一穂 ごめん。俺なんかすごい眠いんだよ。

美波 疲れたんですね。

一穂 ごめんね、お風呂入りたいんですけど、悪いけどちょっとだけ横になるね。起きたら入りに来ていいよ。引き出物に美味しいケーキももらったから……

一穂、その場にゴロンと横になり、あつという間に眠ってしまう。

美波、その横顔に向かって小さな声で「ありがとうございます」と言うと、思いついたように自分の部屋に帰り、毛布を抱えて戻ってくる。

美波、そっと一穂に毛布をかける。

やがて立ち上がり、ゆっくりとベランダの植込みに近づいていく。

植込みの前にしゃがみ込み、じっと見つめている。

美波 まだ冬眠中ですかね？ 静かにしているんで心配しないでください。ほんとは私、トカゲでも蛇でもヒキガエルでも全然ヘーキなんです。でも女の子ってちょっと怖かったり、悲鳴あげたりした方がいいみたいなんですよね。いつもそのまんまの自分ではいられたら楽なんですけどねー

美波、ケージの中の異変に気づく。

美波 あれー いないんじゃない？

美波、ケージの中を何度も覗き込む。

美波 ……やっぱりいない。イツスイさん、トカゲ外に出しました？

一穗、静かに眠っている。

美波、その寝顔を遠くから見つめる。

美波 宣誓！ 私、山岡美波は、無きトカゲの代わりとなって、鈴木イツスイに寄り添い、見守っていくことを誓います。

美波、残りのヨーグルトを食べ始める。

静かに、ゆっくりと舞台溶暗。

終

【引用文献】

『土佐日記（全）』紀貫之 西山秀人編（角川ソフィア文庫）角川学芸出版

『土佐日記 全訳注』品川和子（講談社学術文庫）講談社